

契丹文字談義

—契丹語“虎斯”（力）について—

吉池孝一

東アジアの解読が必要な“文字と言語”に関心を持つ学生と教員の対話。登場人物は次のとおり。

佐藤久美^{きとうくみ}：学生。ツングース系民族の歴史に関心があり金朝史と清朝史を学んでいる。満洲語の講義に出ている。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。いろいろな言葉と文字に関心があり、言語学を学んでいる。モンゴル語の講義に出ている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。各種の古文字資料の収集をしている。学生とともに契丹文字・契丹語の勉強会を始めた。学生に教えられるところが多い。

漢字音訳契丹語

安井教授：今回は『遼史』¹卷百十六「国語解」の虎斯（力）について検討しましょう。

「虎斯 有力稱，紀言虎思，義同。」

虎斯、力有るを【虎斯と】稱す。紀には虎思と言う。義同じ。

山村健一：漢字音訳契丹語の「虎斯」が「力」という意味であることは分かりますが、「紀」というのは何でしょう。

佐藤久美：中国の史書は本紀と列伝とその他からなっています。「紀」というのは本紀のことです。その他の「国語解」に「虎斯」とあるが、「本紀」の部分には「虎思」とある。意味は同じということです。

安井教授：「本紀」の第何巻にあるかということ調べるには、清朝『欽定遼史語解』²が便利です。『欽定遼史語解』をザッと眺めると卷三十にあることが分かります。そこで『遼史』の卷三十を見ると第六丁右³に「虎思斡耳朵」とあります。

虎斯（力）諸説

安井教授：虎斯（力）について述べたもので比較的早いものに白鳥庫吉(1910-1913；1970)⁴

¹ 百衲本二十四史『遼史』臺灣商務印書館、1988年6版による。

² 清高宗勅撰『欽定遼金元三史語解』台聯國風出版社 [1974.7] 遼金元語文僅存録，第6-7冊の第6冊。

³ 点校本『遼史』（全五冊中の第一冊）北京：中華書局、2016年では357頁。

⁴ 白鳥庫吉(1910-1913；1970)「東胡民族考」『史學雜誌』21編～24編。(1970)『白鳥庫吉

があります。もっとも、「(五一) 虎思・虎斯」には具体的な解説はなく、「失韋考の(八) 乞引の條」の解説が、虎思・虎斯の解説を兼ねます。それを①②とまとめてみました。

- ① 虎斯・虎思と、ツングース諸語の *kusun* や *hūsun* など、モンゴル諸語の *khučun* や *khuši* など、トルコ諸語の *küč* や *küs* を同源とする。
- ② 虎斯・虎思と、史書の「乞引」(『隋書』室韋族人名の乞引莫賀咄。乞引は莫賀咄(英雄)を修飾する語)を同源とする。

(五一) 虎思・虎斯 契丹語にては力を虎思・虎斯といふ。その徴は『遼史』卷一一六に
虎思斡魯朶、思亦作斯、有力稱、斡魯朶宮帳名
とあり、「虎斯有力稱、紀言虎思義同」とある是なり。此語の語源に就いては「失韋考」
乞引の條〔本卷二二二頁〕に詳説したれば、茲にまた贅せず。(273-274 頁)

***以下、二二二頁の「失韋考」乞引の條。虎思・虎斯に係わる情報はここにある。**

(八) 乞引 『隋書』の契丹傳室韋の條を見るに、北室韋にては部落の渠帥を乞引莫賀咄といふ。而して莫賀咄が *baghatur* の對音なること已に述べたれば、乞引は此稱號を形容する嘉言なるべし。Tunguse 語族の中、Gold 語に力を *kusún*, *kūsū*、Oročen 語に *kusun*、女真語に忽孫、滿洲語に *hūsun* といひ (Grube. p. 30)、又蒙古語族の中、東蒙古語に力を *khučun*、Castrén 氏の Nizneudinsk 語に *kušeng*、Tunkinsk 語に *khušen*、Selenginsk 語に *khuče*、Podgorbunski 氏の Selenginsk 語に *khuči*、Tunkinsk 語、Balagansk 語、Khorinsk 語に *khuši*, *khušin* といひ (Podgorbunski. p. 277)、又 Turk 語族の中、Uigur 語、Čagatai 語に力を *küč*、Yakut 語、Kara-Kirgiz 語に *küs* といふ (Vámbéry. pp. 104-105)。因て思ふに室韋の乞引 (*kot-in*) は蒙古語の *khučun*, *khučin* の對音なるべし。(222 頁)

山村健一：『遼史』の虎斯と虎思が3つの諸語と同源であるらしいということは理解できます。しかし『隋書』の乞引 (*kot-in*) の方は意味が明示されていないので同源とするためには別の根拠が必要ではないでしょうか。

佐藤久美：白鳥氏のほかに、どのような議論がありますか。

安井教授：その後の議論を幾つか見ましたが、ほぼ白鳥氏の中に納まるようです。

諸資料

安井教授：白鳥氏の議論と重複しますが、契丹語の虎斯・虎思(力)と諸言語との関係を確認しましょう。白鳥氏が利用した文献を利用するのは困難ですので、図書館から手に入れやすい資料を借りだしておきました。手分けして調べてください。

■モンゴル諸語

現代モンゴル諸語：現代モンゴル語辞典⁵と Svantesson (2005;2008)⁶（モンゴル語ハルハ方言）。中国少数民族語言簡誌叢書（蒙古語簡誌⁷（モンゴル語チャハル方言）、達斡爾語簡誌⁸（ダグール語）、東部裕固語簡誌⁹（シラ・ユグル語）、土族語簡誌¹⁰（モンゴオル語）、保安語簡誌¹¹（バオアン語）、東郷語簡誌¹²（ドゥンシャン語））。康家語¹³（カンジャ語）。

中期モンゴル語：漢字モンゴル語「元朝秘史」、「元朝秘史蒙古語辞典」（小澤重男）¹⁴、「傍訳漢語索引」（栗林 均）¹⁵。パスパ文字モンゴル語「碑文」（Tumurtoogoo）¹⁶。ウイグル字モンゴル語「碑文」（中村 淳・松川 節）¹⁷

■ツングース諸語

現代ツングース諸語：中国少数民族語言簡誌叢書（赫哲語簡誌¹⁸（ヘジェン語）、鄂倫春語簡誌¹⁹（オロチョン語）、鄂温克語簡誌²⁰（エウエンク語）、錫伯語簡誌²¹（シベ語））。

古ツングース語：満洲字満洲語「満洲語文語」新満漢大詞典（胡增益）²²・満洲語文語辞典（福田昆之）²³。漢字女真語「女真館訳語」女真文辞典（金啓琮）²⁴。

諸資料の表記を同じ土俵に乗せる

5 小沢重男編著(1983)『現代モンゴル語辞典』大学書林。

6 Svantesson, J.-O. (2005;2008) *The Phonology of Mongolian*. Oxford University Press, New York, paperback 2008.

7 道布(1983)『蒙古語簡誌』北京：民族出版社。

8 仲素純(1982)『達斡爾語簡誌』北京：民族出版社。

9 照那斯圖(1981)『東部裕固語簡誌』北京：民族出版社。

10 照那斯圖(1981)『土族語簡誌』北京：民族出版社。

11 布和・劉照雄(1982)『保安語簡誌』北京：民族出版社。

12 劉照雄(1981)『東郷語簡誌』北京：民族出版社。

13 孫宏開(1999)『康家語研究』上海：上海遠東出版社。

14 小澤重男(1993)『元朝秘史蒙古語文法講義 一附 元朝秘史蒙古語辞典一』風間書房。

15 栗林 均(2012)『『元朝秘史』傍訳漢語索引』東北大学東北アジア研究センター。

16 Tumurtoogoo, D. (2010) *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

17 中村 淳・松川 節(1993)「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII、1-92+8pls.

18 安 俊(1986)『赫哲語簡誌』北京：民族出版社。

19 胡增益(1986)『鄂倫春語簡誌』北京：民族出版社。

20 胡增益・朝 克(1986)『鄂温克語簡誌』北京：民族出版社。

21 李樹蘭・仲 謙(1986)『錫伯語簡誌』北京：民族出版社。

22 胡增益主編(1994)『新満漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。

23 福田昆之編(1987)『満洲語文語辞典』横浜：FLL。

24 金啓琮(1984)『女真文辞典』北京：文物出版社。

安井教授：現代諸語の調査資料は簡略なローマ字表記になっています。これを音声表記に直しましょう。

佐藤久美：どういうことでしょうか。

安井教授：中国から出版される調査資料は“印刷等の便宜のため”ローマ字による簡略な表記になっています。そのローマ字の音声がどういうものかということについては説明があるので、その説明によって音声記号（〔 〕を付す）に変換して提示するということです。なお、モンゴル語ハルハ方言（辞典）の音声の詳細は Svantesson(2005;2008)を参照してください。例えば、
モンゴル語チャハル方言の *guŋ*（力）→〔kuŋ^h〕

佐藤久美：現代諸語の調査資料の処理については分かりました。各種の文字（漢字、ウイグル字、パспа字、満洲字など）で記された過去の資料はどうしたらいいでしょう。

安井教授：過去の資料については、①“翻字”か、②“転写”が用いられています。

- ① 翻字は、文字から文字に一对一にローマ字に書き換えたもの。ウイグル字モンゴル語では KWYCWN（力）のように翻字する。
- ② 転写は、翻字に解釈を加えて当時の実際の音を推定したもの。例えばウイグル字モンゴル語の翻字 KWYCWN を küčün と転写する。

山村健一：翻字も転写も研究者の立場の違いによって異なってきたそうですね。

安井教授：特に転写は解釈の立場の相違により大きく異なります。契丹語の虎斯（力）の検討において問題となるのは、破裂音と破擦音がどのような音によって対立していたかという点です。三つの立場があります。〔k〕を例とすると、

- ① 強音と弱音の対立とする立場。強音は発音器官の緊張。音声としては主に〔k^h~k〕など。弱音は発音器官の弛緩。音声としては〔k~g~g〕など。
- ② 清濁の対立とする立場。清音（無声音）〔k〕と濁音（有声音）〔g〕。
- ③ 気音の有無による対立とする立場。無声有気〔k^h〕と無声無気〔k〕。無気音は、気音さえ無ければ良いので、前後の環境により〔k〕（無声）～〔g〕（半有聲）～〔g〕（有聲）という揺れ幅がある。

山村健一：私たちはどのような立場に立つのでしょうか。

安井教授：③としましょう。これは現代諸語の調査資料とほぼ同じ立場です²⁵。過去のモンゴル諸語とツングース諸語の翻字や転写も、③の立場に拠って音声記号に書き換えてみましょう。例えば、

²⁵ “ほぼ”としたのは『保安語簡誌』（バオアン語）の記述による。この調査資料は無声有気音と半有声音の対立とする。しかしながら、半有声音のような中間的な音を言語活動に利用するのは困難であろう。実際は③の立場と同様とみる。

山村健一：現代諸語と過去の資料とを、③という同じ土俵の上で比較して混乱を避けるというわけですね。

佐藤久美：漢字音は何に拠ったら良いのでしょうか。

安井教授：漢字音訳契丹語の漢字の音は藤堂明保(1978) ²⁷に拠りましょう。親字に4種の音が付されています。①詩経時代の音（上古音）、②隋唐時代の音（中古音）、③元代『中原音韻』（1324年）の音（近世音）、④現代北京語音。この内、③元代『中原音韻』の音を利用しましょう。遼代から見ればやや時代は下りますが、それほど不都合はないでしょう。場合によっては中古音も参照してください。

.....

虎斯（力）検討

安井教授：佐藤さん、確認の結果はどうでしたか。

佐藤久美：虎斯と虎思の元代音は共に hu-si [xusi] ²⁸です。斯と思は同音なのでこれからは虎斯だけを挙げます。『力』の意味を持つ諸語の音形は次のとおりです。翻字や転写の右に [] で音声を示しました。

■現代モンゴル諸語：モンゴル語ハルハ方言 хуц [xuŋ^h] , хучин [xuŋ^hin]

モンゴル語チャハル方言 гуц [kuŋ^h]

ダグール語 куц [k^huŋ^h]

シラ・ユグル語 kudʒən [k^huŋ^hən]

モンゴオル語 kudzə [k^huteə]

バオアン語 kuteiə [k^hute^hiə]

ドゥンシャン語 lilian (漢語“力量 liliang”からの借用語)

カンジャ語 куҗир [k^huŋ^hir]

中期モンゴル語：漢字モンゴル語「元朝秘史」 古出 (güčü) [küŋ^hü]

パスパ字モンゴル語「碑文」 k^hu-č^hun (küčün) [k^hüŋ^hün]

ウイグル字モンゴル語「碑文」 KWYCWN (küčün) [k^hüŋ^hün]

²⁶ 転写 küčün の母音 ü の舌の調音位置は中舌から前舌であろうが、その音声を確定するのは困難なため転写形 ü をそのまま用いて [k^hüŋ^hün] とする。

²⁷ 藤堂明保編(1978)『学研漢和大字典』学習研究社。有気音（帯気音）の表記 k^hなどは k^hなどに変更する。

²⁸ 斯・思の元代音 si の母音 i の調音位置は中舌的あるいは舌尖的なものであろうが、その音声の候補は幾つかあり確定するのは困難なため音韻表記 i をそのまま用いて [xusi] とする。あるいは、斯・思は音節末子音 [s] であり [xus] とすべきであるかもしれないが、やはり確定は困難なため [xusi] としておく。

■現代ツングース諸語：ヘジエン語 kudzun [k^hutsū]

オロチョン語 kuʃun [k^hʊʃ^hun]

エウエンク語 xuʃun [xusun]

シベ語 xusun [xuzū]

古ツングース語：満洲字満洲語「満洲語文語」 hūsun [xusun]²⁹

漢字女真語「女真館訳語」 忽孫 (xusun) [xusun]

山村健一：大半のモンゴル諸語（中期モンゴル語を含む）の語頭は [k^h] ですが、モンゴル語ハルハ方言と契丹語の語頭は摩擦音の [x] となっており、両者は似ていますね。ハルハ方言には少数の外来語を除き、そもそも破裂音 [k^h] は無く、他のモンゴル諸語で [k^h] であるところは [x] となります。その点はチャハル方言も少数の外来語³⁰を除き同じですが、『力』という単語に限って、語頭については事情があって [x] ではなく [k] となっています。

チャハル方言の場合

佐藤久美：チャハル方言は、他のモンゴル諸語で [k^h] であるところは摩擦音の [x] となるということですが、guʃ [kuʃ^h]（力）の場合 [x] でないのはどういう事情によるのでしょうか。

山村健一：ハルハ方言の [t^hat^h]（引く）の語頭の [t^h] を、チャハル方言では無気音の [t] とし、[tat^h] となることはよく知られています。これはチャハル方言において、二つの帯気音（s も帯気音に含める）が隣接すると、前の帯気音が後ろの帯気音の影響で無気音に成る（音の異化が起こる）ためです³¹。guʃ [kuʃ^h] もそれと関連したものでしょう。チャハル方言の guʃ [kuʃ^h] の場合、[k^hʊʃ^h] > [kuʃ^h] という無気音化の後に、[k^h] が摩擦音化し [x] となる音変化が起こったため、この単語は語頭の摩擦音化を免れたわけです。

元朝秘史の場合

佐藤久美：そうしますと、『元朝秘史』の古出（gücü）[küʃ^hü] にもチャハル方言と同様の変化が起こったわけですね。

山村健一：さあ、それはどうでしょう。チャハル方言で、異化（隣接する帯気音の一方が無気音となる）が起こった単語を、『元朝秘史』及びハルハ方言と共に並べると次

²⁹ 満洲語文語の ū は津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』大学書林の 8 頁に拠り [ʊ] とした。

³⁰ [k^hɪnɔɔ] 映画（ロシア語より）。[k^hœʃii] 会計（中国語より）。

³¹ Svantesson (2005;2008)の 205-208 頁参照。

のようになります。

	元朝秘史	ハルハ方言	チャハル方言
引く	塔塔(tata) [tʰatʰa]	[tʰatʰ]	[tatʰän]
青	闊闊(kökö) [kʰökʰö]	[xox]	[gex]
力	古出(gücü) [kügʰü]	[xuɣʰ]	[kuɣʰ]
油	脱孫(tosun) [tʰosun]	[tʰɔs]	[tɔs]

佐藤久美：『元朝秘史』で異化が起こっているように見えるのは [kügʰü]（力）だけです。異化以外の原因を考えた方が良さそうですね。

山村健一：小澤重男(1994)³²によると、13世紀初めから中頃にかけて『元朝秘史』のウイグル字モンゴル語原典ができたのだけれども、14世紀後半の明代洪武年間に漢字に音訳した際に利用したモンゴル語音は音訳当時のものであったとします³³。ウイグル字には k [kʰ] と g [k] の表記上の区別がないので、漢字音訳の時点で、チャハル方言風の音が反映し固定したのではないのでしょうか。もっとも、なぜ [kügʰü]（力）という語だけにチャハル方言が反映したのか分かりません。

佐藤久美：『元朝秘史』の二 27 四には「小鼠」として窟出鼠革捏 (kücügene) [kʰügʰükene]、三 18 九には「野鼠」として窟出古兒 (kücügür) [kʰügʰükür] があります³⁴。「小鼠」「野鼠」を連想させる [kʰügʰü] という音形を避けてチャハル方言により [kuɣʰü] としたのかもしれない。

安井教授：個別の単語の事情に就いては様々な説明が可能ですが、どの説明が有効であるか、説明を支える資料が幾つか出てくるまで温めているしかありません。本題の契丹語の虎斯に戻りましょう。

破裂音 kʰ の有無

佐藤久美：モンゴル諸語の [kʰ] に、契丹語の虎思 hu-si [xusi] の [x] が対応しています。そうすると、モンゴル語ハルハ方言やチャハル方言のように、契丹語も [kʰ] は全て摩擦音 [x] となっていたのではないのでしょうか。

³² 小澤重男(1993)『元朝秘史』岩波新書。

³³ 「さて、「秘史」のモンゴル語原典は、すでに見たように十三世紀初葉から中葉にかけての著作になると言えるが、それを漢字音で書き写したのは十四世紀の後半のことである（これについては後述）。その間、百年以上の開きがある。したがって漢字音写モンゴル語は、十四世紀後半のモンゴル語音を当時の漢字音をもって音写したモンゴル語ということになる。この点を、まずしっかりおさえておきたい。もっとも書写言語の音声を表記する場合には、その書写されている形にひきずられて、しばしばその時代より以前の発音が表記されることもあるので、「秘史」の漢字音写モンゴル語にも十四世紀後半のモンゴル語音よりも一時代まえの姿が時々現われることも考慮に入れておきたい。」(190頁)

³⁴ 小澤重男(1993)『元朝秘史蒙古語文法講義 一附 元朝秘史蒙古語辞典一』風間書房を参照。

山村健一：そのことは于寶林(1998)³⁵にあります。于寶林氏は漢字音訳契丹語を集め分析します。同じ単語の異なる漢字表記により、漢字音訳契丹語では [p] と [pʰ]、[t] と [tʰ]、[k] と [kʰ] は区別されず、契丹語には有気音（帯気音）は無かったと結論します。また、契丹小字で表記された借用漢語において [kʰ] と [x] は区別されないともします³⁶。于寶林氏は明言しませんが、これは“契丹語には [k] と [x] が有ったけれども [kʰ] は無かった”ということと同義です。網羅的な検討から得られた結論ではないので直ちに採用するわけにはいきませんが“示唆的な見解”です。

佐藤久美：私は孫伯君・聶鴻音(2008)³⁷に目を通しました。漢字音訳契丹語の単語を集め、その語頭・語中にどのような音が出るかを調査したものです。挙例は網羅的ではありません。語頭・語中に分けて音の出現を確認するという“方法”が新しいのでしょう。語中の、問題となる漢字にはアンダーラインを付しました。{}は表記が困難な字です。

	語頭	語中
k [kʰ]	可忒、苦統【2】	治夔離、倍其不離、幹勤【3】
g [k]	監母、幹勤、葛兒罕 厥何、郭不離、孤穩【6】	阿古蠟、捏骨地、女古、楚古 阿保機、夷離董、{月忒}俚{塞の土をロに} 胡篤董、秃魯董、拖古烈【10】
h [x]	喝只、賀跋支、紇眞、鶻里 虎斯【5】	掠胡奧、抹鶻、厥何、莫弗紇 秃忽思【5】

山村健一：孫伯君・聶鴻音(2008)で用いられた調査方法と同様の方法によって、漢字音訳契丹語を網羅的に調査した研究に武内康則(2015)³⁸があります。関係する部分を引

³⁵ 于寶林(1998)『契丹古代史論稿』合肥：黄山書社。

³⁶ 「我們將上表中用不同音的漢字來譯記同一契丹語詞的情況進行比較，可以得出什麼結論呢？第一，漢譯字“比”通“皮”，說明契丹語 [p]、[pʰ] 不分；“達”通“撻”（還通“塔”）、“得”通“特”、“篤”通“突”、“{月忒}”通“忒”等說明 [t]、[tʰ] 不分；“割”通“豁”、“葛”通“闊”，說明 [k]、[kʰ] 不分，再加上在契丹小字研究中發現音譯漢字“開”、“空”聲母的原字與音譯“徽”聲母爲同一原字，這實際上說明契丹語 [k]、[kʰ]、[x] 不分；“契”、“奇”通“奚”說明 [tɕʰ]、[ɕ] 不分，又，契丹小字音譯漢字“酒”聲母的原字同“修”聲母原字，說明契丹語是 [tɕ]、[tɕʰ]、[ɕ] 不分；“昭”通“嘲”說明 [tʂ]、[tʂʰ] 不分。通過上述可以得出結論：契丹語無送氣音（或不分清濁音）。」（347頁）。なお、遼代の漢語音として舌面音 [tɕ] [tɕʰ] [ɕ] の使用は不適当。

³⁷ 孫伯君・聶鴻音(2008)『契丹語研究』北京：中国社会科学出版社。

³⁸ 武内康則(2015)「『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻」『内陸アジア言語の研究』XXX、1-27頁。

用します。

声母	用いられている漢字	総数
k-	【語頭】(見*k-)歸 1, 孤 2, 糾 1, 監 1, 厥 1, 葛 1, 鑿 1, 隔 1, 國 1	10
	【語中】(見*k-)公 3, 幾 1, 姑 2, 孤 1, 乖 3, 瑰 2, 昆 5, 干 1, 塙 1, 瓜 1, 金 1, 過 1, 幾 1, 古 15, 改 2, 謹 1, 董 2, 袞 2, 蹇 1, 果 6, 谷 1, 吉 1, 厥 2, 骨 5, 割 1, 葛 8, 括 2, 決 1, 鑿 1, (羣*g-){塞の土を口にした字} 1	75
k ^h -	【語頭】なし	0
	【語中】なし	0
x-	【語頭】(曉*h-)虚 1, 權 1, 虎 6, 旭 1, 歎 1, 喝 1, 血 1, 吸 1, (匣*f-)兮 1, 奚 3, 渾 2, 毫 1, 和 1, 霞 1, 候 1, 紆 1, 曷 3, 轄 1, 穴 1, 頡 1, 合 12, 匣 1, 鶻 3	46
	【語中】(曉*h-)化 1, 罕 1, 狻 5, 忽 2, 豁 1, 血 2, (匣*f-)會 1, 曷 1, 合 3, 挾 1, 渾 1, 何 1, 河 1, 樺 1, 褐 1, 鶻 1, 完 1,	25

佐藤久美：[k^h] が語頭と語中でゼロとなっています。孫伯君・聶鴻音(2008)には [k^h] があり、語頭は可忒と苦統、語中は治夔離と倍其不離と幹勤です。この違いはどういうことでしょうか。

山村健一：武内康則(2015)は、于寶林(1998)が諸文献資料から収集した漢字音訳契丹語（人名は含まない）を基礎資料とし、そのなかの『遼史』のみデータとして利用し、また『遼史』のものでも伝来の古いものは排除して資料の均質化を図っています。そのために [k^h] がゼロになっているというわけです。

安井教授：表を検証してみましたか。

山村健一：[k^h] については確認しました。于寶林(1998)の『遼史』のデータ中に、[k^h] を持つ語は2語ありました。国名の「契丹」と可汗名の「奇首（奚首）」です。契と奇はともに [k^h] です。契丹については、武内氏は古い音訳を踏襲したものとして採用しないとします。奇首（奚首）は契丹の伝説の首領の名ですが、恐らく同様の処理をしたものと思われます。なお『遼史』以外で [k^h] を持つ語は8つあります³⁹。

³⁹ ①「笱（笱却） 日蝕 南部新書」。却は中古音溪母であるので k^h-。②「幹勤（感勤） 厚重 詩話總龜」。勤は中古音群母平声。『中原音韻』は平声陽に置くので k^h-。③「紆便（折紆便、折紆便） 部族名 册府元龜」。折は中古音群母平声。『中原音韻』は平声陽に置くので k^h-。④「可忒 無極 中山詩話」。可は中古音溪母であるので k^h-。⑤「坤不克（坤不

佐藤久美：この表は“契丹語には [k] と [x] が有ったけれども [kʰ] は無かった”とする于寶林(1998)の“示唆的な見解”を支持していますね。これは現代モンゴル語のハルハ方言やチャハル方言と同じです。ところで、『遼史』の音訳漢字では綺麗に [kʰ] が排除されているのですが、それ以外の資料で少数ながら [kʰ] が現れるのはなぜかということを考えておかなければなりません。

異なる文献に [kʰ] が散見されるのは何故か

山村健一：武内康則(2015)は、遼代の契丹小字碑文に見られる契丹小字の用法もまとめています。契丹小字文には、役職・地名など多量の漢語が含まれるわけですが、漢語を表記する契丹小字の用法は『遼史』の漢字音訳契丹語が示す [kʰ] が排除される傾向と矛盾しないとのこと⁴⁰。このような契丹小字の用法は于寶林(1998)でも指摘されているところです。そうであるならば、『遼史』の編纂時期は遼代よりも下った元代ですが、そこに見える漢字音訳契丹語の音は、遼代の契丹語を反映していることとなります。それを前提に考えてみましょう。

佐藤久美：契丹という民族集団の構成員の出自は様々でしょう。比較的純粋は契丹人を中核としつつ、[kʰ] 音を持つトルコ系やツングース系の人、また後に中期モンゴル語を担うことになる [kʰ] を持つモンゴル系の人、もちろん漢人など様々でしょう。その人たちが話す“契丹語”が同一であったとするのは幻想です。多くの構成員は“[k] と [x] があり [kʰ] はない”契丹語を話すのででしょうが、一部は出自に係わる言葉の影響で [x] とすべきところを [kʰ] としていた。そのような“契丹語”が、文献資料の異なりによって顔を出したのでしょう。

山村健一：もともとの契丹人であっても、遼代が [kʰ] から [x] への音韻変化の途上であったならば、一部の老人の契丹語や一部の周辺地域の契丹語では、旧来の [kʰ] をもって話をする人たちがいるはずです。それが文献資料に反映することは有り得るでしょう。

佐藤久美：ところで、奇首の奇は [kʰ] ですが、『遼史』では奚首とも表記されているのですね。

刻) 鬼風 燕北録」。坤は中古音溪母であるので kʰ-。克・刻は中古音溪母であるので kʰ-。
⑥「萋珂忍 龍虎 燕北録」。珂は中古音溪母であるので kʰ-。⑦「苦統 福祐 中山詩話」。苦は中古音溪母であるので kʰ-。⑧「治夔離 萬歳 燕北録」。夔は中古音群母平声。『中原音韻』は平声陽に置くので kʰ-。

⁴⁰ 「中国語の k-, kʰ-, x-の契丹小字での表記は複雑である。声母 k-は、基本的には 𐰽 で記される一方で、声母 x-は 𐰽・𐰽・𐰽 など多くの文字で記され、区別して表記されていることがわかる。また、声母 kʰ-も 𐰽・𐰽 で表記されており、声母 k-とは区別されている。したがって、契丹語では中国語の声母 k-と kʰ-, および k-と x-は弁別的であったと考えられる。その一方で、声母 kʰ-と声母 x-は 𐰽 や 𐰽 など同じ文字によって表記されていることから、契丹語では中国語の声母 kʰ-と声母 x-は非弁別的であったと考えられる。」(22頁)。

山村健一：『遼史』は奇首（伝説の首領の名）を各所でこのように表記するのですが、一カ所だけ奚首となっています。

佐藤久美：奚首の奚は [x-] ですから、奇首という伝統的な表記のなかに、実際の音が顔を出したのでしょうか。伝統的な表記の影響もあるでしょうが、『遼史』ではほぼ [kʰ] が排除されるという表記になっています。『遼史』の内容は粗雑であると後代に非難されますが、契丹語の表記については統一を図ったのでしょうか。

安井教授：現実の言語集団は様々な人を含んでいるので、文献が異なると異なった音 [kʰ] が出るというのは、むしろ自然なことなのでしょう。それよりも気になるのは、契丹語の虎思 [xusi] と、女真語（明代の女真館訳語） 忽孫 [xusun] と満洲語文語 [xosun] の表記が近似しているということです。

契丹語と女真語の表記が近似するのは何故か

山村健一：安井先生のご指摘は、多くの言語で [kʰuŋʰün] のように2つの子音が破裂音の要素を持っているところ、契丹語「虎思」 [xusi] と女真語「忽孫」 [xusun] は摩擦音となっており近似しているが、このような両言語の近似は何に拠るものかということですね。

佐藤久美：女真は、遼朝の支配の下、東アジアの東北の隅で活動していたわけですから、政治的にも文化的にも遼の契丹語の影響を受ける立場にあります。素直に見れば、契丹語の影響として良いのでしょうか。それが満洲語文語に受け継がれたということですね。

山村健一：もしも女真語に文語的な音形と口語的な音形の2種が認められ、文語的な音形と契丹語が一致するのであるならば、契丹語から女真語へ借用されたと言えるのでしょうか、残念ながら今のところ、そのような資料はありません。問題は、白鳥庫吉(1910-1913 ; 1970)の挙例にもあるように、トルコ系、モンゴル系、ツングース系に広く共通した音形が現れるのは何故かということです。『力』のような抽象的な語が、3諸語に共通した語（共通祖語）として有ったとは考えにくく、何らかの理由（シャーマニズムなど宗教的な要因など）によって互いに借用され広がったとする可能性を考えたほうが良いように思います。そうすると10世紀の契丹の隆盛よりも前の時代を考慮しなければならないので、契丹語から女真語へ借用とも言い切ることはできません。

安井教授：先にも言ったように、個別の語の事情については様々な説明が可能です。皆さんの課題として温めておいてください。今回はこれまでとしましょう。